CASA連続市民講座

第20期 地球環境大学

福島原発事故と私たちの未来

課外講座　「大飯原発見学会」

とき：2012年8月25日（土）8:00 ～ 20:00
場所：関西電力大飯原子力発電所ほか

今回の課外講座では関西電力大飯原発と原発マネーによる公共施設を直に見て、町の現状と原発受け入れ経過などをおおい町議会議員さんからお話を聞いた後、美浜町の原発ＰＲ館を見学しました。

※本文中囲み部分がアンケート等からの抜粋、引用で匿名にて掲載した。(掲載の写真は全て当日、CASAスタッフによる撮影。)

午前8時大阪出発。参加者は42名（スタッフ含む）。途上バス内で早川専務理事から、大飯原発再稼動不要のCASA提言について説明があった。（レター77号参照）

写真1　情熱的に語られる猿橋議員

大飯高浜インターを出た所で、おおい町の猿橋巧議員が合流された。（**写真1**）町議会でただ一人反原発の立場の方で、7期、28年の議員歴。原発建設の当初から反原発の姿勢を貫いて来られたとか。猿橋さんはまず車窓に見えるおおい町の様子について説明された。最初は佐分利小学校の校舎。一見外国のリゾートホテルかとも見える立派な建物は電源三法交付金*1（原発マネー）で建設された。

写真2　おおい町と高浜町の境界に立つ鉄塔。重機が見える。

「小学校の建設費が約26億円でしかも予算が文部科学省からではなく経済産業省から出ているのには驚きを感じた。」「60数名の児童のための何十億円の小学校にはおどろいた。山の上を送電線が異様に走り、ここにもバランスのくずれた現実を見た。」

次は高浜町とおおい町の町境に立つ高圧電線鉄塔（**写真2**）。高くて電線が沢山あるのは大飯原発からの出力。低い位置にある鉄塔が大飯原発への外部電源供給ライン。原発は、作った

＊1　電源三法交付金とは国庫補助金の中で、電源開発促進税法・特別会計に関する法律・発電用施設周辺地域整備法の三法のこと。1974年に火力発電以外の電源（原発）を開発し火力発電依存度を下げる為に制定された。

写真 3

電気は全て送電し、運転のためには外部電源が必要とか。だから万が一外部電源ラインが断たれると、炉の冷却などができなくなり、その果てはメルトダウンの可能性がある。猿橋さんが示された外部電源ライン鉄塔は、足場の補強工事で重機が入っていた。最近の豪雨で地盤が緩み、転倒・断線の危険があるとか。「原発運転の安全面で、今一番危険な場所です。」と猿橋さんが強調された。

「身近に送電線が見え、静かな町並みの中に立派な施設が並び、これが原発をかかえる地元なのだと感じました。」

原発を海上から見る為、観光船に乗船した。まず青戸大橋（**写真 3**）を船はくぐる。大島半島とおおい町沿岸を結ぶ橋がない頃は渡し船が運行していた。この橋は関西電力が原電道路として建設した。設置後 40 年余を経過し、老朽化が進み、危険なので複数の避難経路が必要だという住民の要望がある。

「青戸大橋が大島地域の悲願だったと聞くと、電力会社の住民の足元を見すかしたやり方に気分がふさいだ。」

船が岬を回りこんで外海に面したとき半島のくぼみに 4 基の原発建屋が見えてきた（**表紙写真参照**）。再稼動して、今日本で唯一核の火が燃えている 3 号と 4 号を含む大飯原発の本体だ。大飯原発の敷地面積は、約 188 万㎡（甲子園の約 50 倍）。加圧水型軽水炉（PWR）で建設費は 4 基合計約 1 兆 200 億円。その海岸線には申し訳のようにテトラポットが積み上げられている。

ストレステスト報告で関電は「11.4 mの津波の重畳を想定した場合でも、原子炉および核燃料ピットにおける燃料の損傷が防止できる。」としているが、現状ではもっと低い津波でさえも耐えられないのではないか。

また、原発敷地内の破砕帯が活断層である可能性も指摘されている。

「大飯原発を含めどの原発も海に面しているので、やはり津波への対策がどうなされているか気になりました。美浜原発では 3 ～ 5m の防波堤を建設予定だとか言っていたが、東日本震災での津波は 10m を越えるのもあったというので正直不安になりました。」

大飯原発の敷地内を走る断層が活断層である可能性が指摘されている問題について、経済産業省原子力安全・保安院は 18 日、断層の再調査を関電に指示した。

また猿橋さんからは「原発再稼働を決定した時は 5000 件もの抗議が寄せられ数日間担当職員は仕事にならなかった」という話もあり、原発を抱える地元の混乱や困惑が想像された。

バスの中で猿橋議員のお話をさらに聞く。「うみんぴあ大飯」という公共施設群の説明だった。文化・スポーツ・教育・娯楽の立派なハコ物（**写真 4**）が並んでいる。

写真 4

「サッカー場の建設も予定されていて、その費用は10億2千万ぐらいなのには恐愕した。」「町の施設が多くおどろく。しかし今後管理費などが住民に重くのしかかることを考えるとやりきれない。」「人間を堕落させる社会的不正義を、文献やメディアに加えて自分の目で見て実感したことは大きい。できるだけ多くの人がこの不正義、社会悪の実態を直視してそれぞれの行動に生かしてほしいと思う。」

昼食休憩後猿橋さんからは、さらに大飯原発再稼働にあたっての議会討議資料、事故発生時の避難区域の概要やヨウ素剤と甲状腺検査準備など詳しい説明を聞いた。参加者からは猿橋さんへの感謝と励ましの声が多数あった。

「一貫して取り組んでこられたことを高く評価する。精力的かつ誠実、率直な語りに好感をもつ。今後一人でも多くの理解者、支援者、協働者が現れることを祈っている。」「内容が豊富。時間の関係上広く浅くしか聞けなかったのが残念。地元ならではのなまなましい話が聞けて(暴力団など)原発の闇の部分をより深く感じた。」「おおい町民は都市のため原発を受け入れさせられた被害者だったが、再稼動を許して加害者になったという認識を聞いてはっとした。」

「大飯原発が事故を起こしたときのために、原発の近隣の住人に被爆したかどうかを調査する用紙が用意されていることを知った。」

その後、猿橋さんは参加者の拍手に送られてバスを降りられ、我々は美浜町へ向かった。

午後3時30分ごろ美浜町。美浜原発のある敦賀半島の西海岸線をバスは進む。水晶浜等の美しい海水浴場は子ども連れでにぎわっていた。泳ぎながら眼前に**写真5**のように原発が見られる海岸である。子どもたちが遊ぶ白砂の海水浴場と、眼前の原発のアンバランスさを強く感じられた参加者もおられた。

原発ＰＲ館での説明は一般的な原子力の説明に終始した。

「PRセンターにて炉心模型を見た時の『制御棒がこのように動くから安全です』という説明は、3.11後の今もそんな表現でいいのか？疑問に思った。」「猿橋さんのお話を聞いた後だったからかも知れませんが美浜原発PRセンター見学は心に響くものがありませんでした。」「美浜PRセンターの案内係(男性)の答弁は予想どおりと言えば予想どおりでしたが、それだけ我々を恐れていることの反映ではないでしょうか。」

その施設見学を最終にして、帰路についた。

写真5　海岸から美浜原発を望む。

美しい海と半島の中の波打ち際とも言える所の建屋の中に、決して外に出してはならない放射性物質が閉じ込められていることに背筋の凍る思いがあった。一刻も早くその核の火を止め、安全なエネルギーを活かし原発に頼らない社会制度を日本中にいきわたらせることの重要性を強く感じました。

（報告：古畑　等、CASAボランティア）